

令和4年度特別企画展「コケの不思議展」について

久保晴盛・富澤まり

はじめに

植物公園では、年に1度、自主企画の特別企画展を開催している。テーマは毎年変えており、今年度はコケ植物に焦点を当てた「コケの不思議展」を2022年9月23日（金・祝）～12月25日（日）の日程で開催した。企画の経緯と展示や関連イベントについて、以下に記す。

テーマ選定について

全国的にコケ植物の企画展示は事例が少ないが、近畿地方の各植物園（京都府立植物園・神戸森林植物園・咲くやこの花館など）では10年ほど前から、コケ植物の愛好家団体「岡山コケの会関西支部（オカモス関西）」と共催でコケ植物の展示会を継続的に行っており、好評を博しているとのことであった。

また、広島県内にはコケ植物の愛好家団体は存在しないが、広島大学においては1世紀近く継続的にコケ植物の研究活動が行われており、様々な学術資料が収蔵されていることがわかった。

これまで園内では、自生するコケ植物の目録を作成したり（広島植物公園紀要7：41-46）、コケ植物の見本園を作成（同栽培記録38：45-47）するなど、断続的に取り組んだことはあるが、展示会のテーマとしたことはなかった。しかし、昨今は、コケ植物を用いた園芸への関心の高まりが認められ、本園の秋のグリーンフェアで毎年実施しているコケ玉づくり体験は行列ができるほど人気があることなどから、この機会にコケ植物をテーマとした特別企画展を初めて開催することとした。

展示内容の検討

展示内容を検討するにあたり、幅広い世代の方に展示への興味・関心を抱いてもらい、来園動機に結びつけるため、ここでしか見られない価値のある資料を探し求めることにした。

まず、広島大学大学院統合生命科学研究科植物分類・生態学研究室（東広島市）において長年にわたってコケ植物の研究が行われており、

標本などの貴重な学術資料を多数保有されていることから、同研究室の山口富美夫教授（広島市みどり生きもの協会理事）に展示協力と資料の借用依頼を行った。蘇苔曼荼羅（写真1）や琥珀に閉じ込められたコケ化石などの目玉展示は全て同研究室に収蔵されていた資料であり、広く市民に公開したのは初めてのものも多数存在した。

また、コケの園芸に関する展示では、広島でコケテラリウムの創作活動をされているmom.（ママ.）舩岡 起久子さんに作品制作と展示を依頼し、コケの写真については、広島県緑化センター所長の山根道広さんが撮りためられていた接写写真を多数提供いただいた。

これらに加えて、展示パネルの原稿や映像資料などは、先行してコケ植物の展示会「こけティッシュ 苔ニューワールド！ -地球を包むミクロの森- 会期2021年10月16日（土）～2022年2月6日（日）」を企画されていたミュージアムパーク茨城県自然博物館から、コケの亚克力標本については国立科学博物館からそれぞれ協力・提供いただいた。

展示概要・レイアウト

展示の導入（イントロ）として、会場の入口正面に全長3.6mの蘇苔曼荼羅（コケ植物のカラー写真作品）を配置し、コケ植物の形態の多様性を来場者に印象付けることとした（写真1）。過去の展示会でも養蜂作業をモチーフとしたジオラマ（ミツバチと花の“おいしい”関係展）や厳島神社の大鳥居の縮小模型（宮島の植物展）などを同じ位置に配置したことがあるが、どのような催しを室内で行っているのかを視覚的に端的に伝えることができ、記念写真の撮影にも使われるなど、来園者の評判が高かったため、今回も同様の配置とした。



写真1 蘇苔曼荼羅（せんたいまんだら）

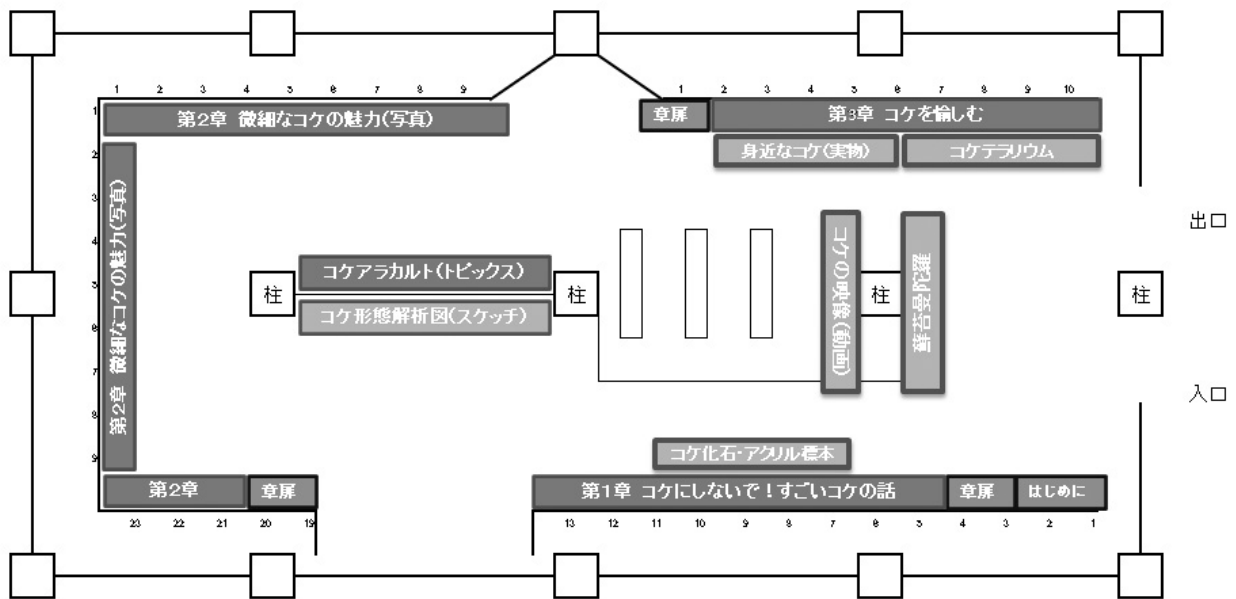


図1 会場レイアウト

展示概要・レイアウト

今回の展示では、大きく3つの章立てを行い、コケ植物について幅広く体系的に学べるように工夫した(図1)。

第1章 コケにしないで! すごいコケの話

コケ植物の特徴(分類や生態などの基本的な情報)をパネル8枚で解説した。今回の展示では、幅広いテーマをより分かりやすく解説できるように、それぞれのパネルを問答形式で作成した。

例えば、「コケは植物なの? 花は咲くの?」という問いかけをし、「コケは植物のなかま(陸上植物のグループのひとつ)です。…」と数行程度で簡単にまとめ、その下に写真や図などで詳しく解説する形のレイアウトとした。この形にすることで、来場者の興味がある部分だけを読み深めたり、全体を幅広く見通せたりとそれぞれのニーズに合わせた展示にすることができた。

また、同章ではコケ化石「クンノコゴケ」のタイプ標本や世界最大・最小級のコケ、南極のコケなど珍しいコケ植物の実物資料(標本)の展示・解説を行い、貴重な資料を広く公開することとした。これらの資料は、マスコミ報道や広報に用いた展示会ちらしなどで積極的に取り上げられることとなり、来場動機を高めることにも結び付いた(写真2)。



写真2 コケ化石など貴重資料の展示

第2章 微細なコケの魅力

コケ植物の接写写真約70枚を額装した状態で借り受け、分類体系順に展示した(写真3)。

様々な分類群のコケ植物の接写写真を並べることにより、美しいコケの世界を伝えることはもとより、形態の類似性・多様性を図示することにもつながった。微細なコケ植物を観察するためには、ルーペや顕微鏡で拡大することが不可欠であり、一般の人が興味を持ち、調べるうえでのハードルの一つになる。この展示では、単に美しい写真の展示ではなく、他の資料も含めて専門家が同定した資料を整理して展示することで、コケを知り、コケに親しむまたとない機会を提供することができた。



写真3 コケ植物の接写写真の展示

第3章 コケを愉しむ

多様なコケの楽しみ方の一つとして近年注目が集まっている「コケテラリウム」約30点を上下2段の棚に配置し、長期展示を行った(写真4)。

あわせて、ハイゴケやゼニゴケなど約15種類の園内で見られる身近なコケ植物の生体展示も行った(写真5)。身近なコケ植物は会期中に3回入れ替えたが、乾燥した室内で長期間維持させることは難しく、展示方法には課題が残った。



写真4 コケテラリウムの作品展示



写真5 コケ植物の生体展示(ギャラリートーク時)

関連イベント

関連イベントとして、以下の4つの催しを企画した。企画にあたっては、多くの方に参加いただけるように、学術的なものだけでなく体験型のイベントも含め、幅広い内容のものを企画した。

(1) 特別企画展講演会

10月29日(土)13時半から、展示資料館2階講堂において、特別企画展講演会「コケの不思議な世界」を開催した(写真6)。講師は広島大学統合生命科学研究科教授の山口富美夫先生に依頼し、コケ植物のイロハから世界中をフィールドに研究してわかったことまで、幅広い内容を分類学の専門家の立場からわかりやすく解説いただいた。参加者は65名、講演後には質問もあり、活況であった。



写真6 講演会の様子(講師の山口教授)

(2) コケ園芸体験

コケ園芸体験として、10月30日(日)にコケ玉講習会(コケ玉づくり体験)を、10月8日(土)と12月3日(土)にコケテラリウム体験をそれぞれ実施した。

コケ玉講習会は例年秋のグリーンフェアの企画の一つとして、(一社)広島市造園建設業協会が実施しているイベントであるが、今回は天候に恵まれたこともあり、子供から大人まで多くの参加者で賑わった。

コケテラリウム体験は、約2時間かけてオリジナルのコケテラリウムを作成するワークショップとして実施した。各回8組を当日受付したところ、全ての回で満席となり、人気体験となった。



写真7 コケテラリウム体験の様子

(3) コケ観察会

事前申込制・現地集合の形で、各回20名の参加者を募り、11月12日(土)の龍頭峡(安芸太田町)と12月11日(日)の広島大学(東広島市)の計2回の観察会を実施した。講師はそれぞれ広島大学統合生命科学研究科教授の山口富美夫先生と同准教授の坪田博美先生に依頼した。

龍頭峡は、蘚苔類学会が指定する「日本の貴重なコケの森」に広島県内で唯一指定された渓谷であり、ダチヨウゴケやヒノキゴケなど渓谷沿いに広がる美しいコケを観察した。

また、広島大学東広島キャンパスでの観察会では、大学の学生実習室を使って、顕微鏡を使ってのコケの観察を行った(写真8)。初めて本格的な顕微鏡を使う方が多く、操作に手間取った印象はあったものの、コケのミクロな魅力と奥深さを体験できる貴重な機会を提供できた。



写真8 コケ観察会②広島大学での顕微鏡観察

(4) ギャラリートーク

10月10日(月・祝)、11月10日(木)、12月10日(土)の各10時から、会場において、担当

職員が展示内容を解説するギャラリートークを実施した。参加者はそれぞれ、25名、15名、3名。人数は多くなかったものの、コケ植物の栽培や観察などに関心の高い方の参加が毎回あり、多くの質問や疑問に回答し、説明することができた。

まとめ

開催期間(9月23日～12月25日)の計80日間の総入園者数は39,384名であった。会期中に新型コロナウイルス感染症に関係したイベント自粛などの措置がなかったこともあり、昨年度のミツバチと花の“おいしい”関係展と比べると6倍以上の入園者数となっており、一定程度の展示効果があった。

今回の展示会では、他園でもあまり取り上げられないことのないコケ植物をテーマに企画展を開催したが、広島に根差したコケ研究の一端をお披露目することができ、コケ園芸に関してもテラリウムの地元作家を紹介することができた。植物公園で実施する特別な企画展示として、植物により興味関心を持つことにつながる展示にすることは当然のことであるが、一つのテーマを通じて人とモノを有機的に結びつけることで、新たな取り組みへの種をまくことも重要だと感じている。今回の展示会で整理した資料や知見を今後の植物公園の広報・教育普及に活かしたいと考えている。

謝辞

本展示会には、以下の方々にご協力いただきました。ここに深く感謝の意を表します。

協力者(50音順)

井上侑哉 様、鶴沢美穂子 様、片桐知之 様、
嶋村正樹 様、関太郎 様、坪田博美 様、
出口博則 様、寺田勝彦 様、山口富美夫 様、
山根道広 様

協力機関・団体(敬称略、50音順)

独立行政法人国立科学博物館、高知大学、広島大学、広島県緑化センター、ミュージアムパーク茨木県自然博物館、サクラオブルワリーアンドディスプレイラリー